

# 研究室を移るとのこと



若 者

森田 亮介\*

Changing Laboratory

Key Words : Osaka University, Suita campus, Culture shock

## はじめに

私はこの春に京都大学大学院情報学研究科の博士後期課程を修了し、大阪大学大学院情報科学研究科に特任研究員としてやって参りました。B4からD3までの6年間、ずっと同じ研究室に在籍していたので、初めて研究室を移るということを経験しました。研究室を移ると、それまで当たり前だと思っていたことが、実はそうでなかったりと、様々な発見があります。ここでは、そうした驚いたことや、気づいたことなどを、新参者の視点から紹介していきたいと思います。

## 阪大のキャンパス

やはり、大学を移るといのは一番の変化です。大学が変わるところも違うのかということは何度も認識させられます。

まず、キャンパスが広いということです。歩いて通勤すると、大学構内に入ってから、研究室のある情報科学棟に到着するまで20分もかかってしまいます。また、キャンパスが広いがゆえに、人口密度が低いということです。講義棟が密集しているエリアではそうでもありませんが、私のいる情報科学棟周辺では、平日でも、「あれ、今日授業やってんのかな」みたいな感覚になります。キャンパスの広さに関して言えば、これまで私の在籍していた京大も、

実はそれなりの敷地面積はあるはずなのですが、公道をまたいで分散しているために、体感としてそれほどないのです。

吹田キャンパスへの交通手段を見てみると、やはり自動車の多さが目立ちます。学内で自動車を気にしながら横断歩道を渡る必要があるのは初めてでした。京大では、自動車が少なく、道路の真ん中を歩いていても平気だったので、カルチャーショックです。また、学内に路線バスの停留所が複数あるのにも驚きです。むしろ、学内に路線バスが乗り入れていること自体が驚きです。バス停が近くて便利ではあるのですが、その一方、鉄道に関しては（特に工学部エリアは）微妙と言わざるを得ません。阪急電鉄さんにもう少し頑張ってもらって、阪大まで延伸してもらえないだろうか。

吹田キャンパスに自転車で通う方も多いですが、これに関しても特徴的なことがあります。丘陵地にあるせいか、いわゆる「普通のママチャリ」が少なく、スポーツバイクや電動アシスト自転車が非常に多いということです。一見普通のママチャリに見えても、変速付きである場合がほとんどです。学生に聞いて見ると、なんの疑問も持っていなかったのですが、これは驚くべきことです。そもそも変速なしの普通のママチャリがこのエリアであまり売っていないらしいのですが、それは丘陵地だからであって普通ではないのですよ、みなさん。

また、キャンパス内が（いろんな意味で）静かな印象があります。吹田に来て以来、ピラまき・ティッシュ配りに遭遇したことがありません。サークル等に関しては、きっと一般教養科目が全て豊中のためだろうと解釈していますが、それにしても静かです。規制が行き届いているのでしょうか。さらに言うと、拡声器でデモをする人もいないし、「〇〇を糾弾せよ」のような過激な立て看板もありません。



\* Ryosuke MORITA

1984年12月生  
京都大学大学院情報学研究科システム科学専攻博士後期課程修了（2013年）  
現在、大阪大学大学院情報科学研究科特任研究員（常勤）博士（情報学）  
制御工学  
TEL：06-6879-4247  
FAX：06-6879-7871  
E-mail：r-morita@ist.osaka-u.ac.jp

たぶんそれが普通だとは思いますが、とても平和です (図1)。



図1: 京大 (Wikipedia より)。いい感じに写っているが、写真のすぐ横に過激な立て看板がある。

### 組織に関して

大阪大学には、総合図書館・生命科学図書館・理工学図書館・外国学図書館と、4つの図書館がありますが、これも私がいた京大とは異なっています。京大では、1つの大きな図書館 (と桂・宇治分室) と、それぞれの部局の図書室に分かれていました。探している図書が、必ずしもメインの図書館にあるわけではないので面倒ですが、その分蔵書数は多い印象でした。一方、阪大では、理工系の図書は、とりあえず理工学図書館に行けばだいたい見つかるので、便利です。

図書館に限らず、大学という所は、どこでも部局ごとにある程度ばらばらに運営されている場合が多いと思います。とくに阪大はそれが顕著だと感じたことがあります。それは職員証と図書館利用者票が別々だということです。加えて建物のカードキーと、生協の組合員証もあるので、財布の中はカードだらけです。合体できないのでしょうか? さらには、職員証が部局ごとに発行されるので、ウチはラミネート加工だけだが、あそこはプラスチックカードなんてこともあります。

もちろんカードだけでなく、ID もばらばらです。書類を書くにしても、それぞれ違うなんとか番号を書かなければならないので、全部覚え直しです。覚えられません。

### 教員と学生

私のいる情報数理工学専攻は、規模が小さいこともあり、教員が専攻の学生ほとんどの顔と名前が一致しているそうです。衝撃的です。学生が先生に名前を覚えてもらっていると、質問や相談がしやすそうで、とてもいい関係だと思います。その代わり、悪いことはできませんね。実は私が学生時代に知らなかっただけで、大学教員はみんなそうだという可能性は考えないことにします。

学生時代の研究室も、現在の研究室も、制御理論の研究を行なっているのですが、学生の持つ知識は違います。私の所では、工学部応用自然科学科応用物理学科の学生が入ってきます。なんだか難しいので「結局、専門分野は何ですか」と聞くと「物理です」という答えが返ってきます。物理? ええ~!? なんかついイメージが広すぎないか? なんて思っています。実は私は「物理工学科」という学科を卒業しているのですが、その実態は機械や材料などの旧学科の寄せ集めで、京大工学部に「応用物理」相当の学科は存在しません。その中でも、私は機械系出身なので、学生との知識のギャップがあります。例えば、ゼミなどで学生の発表を聞くと、文字と数式だけで説明が進んでいきます。私はついていくのが精一杯なのですが、周りの皆さんはさも当然のように涼しい顔をしています。バネ・マス・ダンパ系 (図2) のような、(自分にとって) 分かりやすいイメージに例えて理解したい所なのですが、待ったなしです。逆にこのイメージで周りに話すと、なぜそんな難しいことを考えるのだと言わんばかりの顔をされてしまいます。

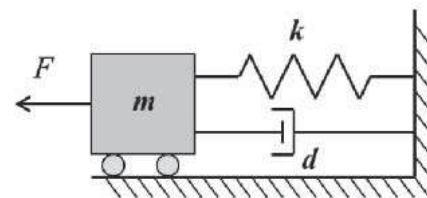


図2: バネ・マス・ダンパ系。機械系の基本。

### 設備

研究室の設備に関しては、その研究室を運営する先生の方針でがらりと変わります。例えば、現在お世話になっている計画数理講座では、学生1人に

つき、約1台のデスクトップPCを使っており、学会発表等で使うラップトップは皆で共用しています。一方、学生時代の研究室では、ラップトップの方が1人1台で、デスクトップ数台を共用していました。研究の効率や盗難の危険性などを考えると、どちらも一長一短です。

また、今の研究室には、数理の研究室ということもあり、実験装置がほとんどありません。同じ制御理論の研究をしていますが、以前は多くの実験装置があり、ネジと工具がそのへんにゴロゴロ転がっているような研究室にいたので、すこし寂しい感じもあります。その代わり、安全衛生のチェックがあるからといって、大騒ぎにもならない、非常にきれいな環境です。

## おわりに

お話を頂いた際に、内容は自由と言われて、さて何を書いたものだろうかと思案したあげく、せっかくなので、ちょっと変わったことをしてみようと思い、書かせていただきました。同じような境遇だった方には、「そんなこともあったなあ」とニヤリとさせていただき、そうでない方には、改めてご自分の環境を見直すきっかけになれば幸いです。最後に、学生時代にご指導を頂いた京都大学大学院情報学研究科の杉江俊治先生、現在お世話になっている大阪大学大学院情報科学研究科の藤崎泰正先生に感謝申し上げます。また、本稿執筆の機会を与えていただきました大阪大学大学院情報科学研究科の森田浩先生、並びに「生産と技術」の関係者の方々にお礼申し上げます。

